

---

## 「日光の社寺」にみる世界遺産登録とその課題

---

Research Notes

皆川義孝

### はじめに

平成 11 (1999) 年 12 月 2 日、モロッコのマラケッシュで開催された第 23 回世界遺産委員会において、「日光の社寺」は正式に世界遺産として登録された。同 4 年に日本が世界遺産条約を批准してから、国内としては 10 番目（文化遺産としては 8 番目）の登録となった。

「日光の社寺」は、日光市山内にある二荒山神社・東照宮の二社と輪王寺の一寺に関する 103 棟の建造物群（うち国宝 9 棟、重要文化財 94 棟、表 1 参照）の宗教建築の文化遺産と周囲の文化的景観から構成され、その面積は推薦資産 50.8 ヘクタール（コアゾーン）、また遺産を保護するための緩衝地帯 373.2 ヘクタール（バッファゾーン）からなる<sup>(1)</sup>（図 1・2 参照）。

つまり、「日光の社寺」は建造物群と文化的景観から構成される文化遺産であること。また、世界遺産登録の建造物群は日本の文化財保護法の指定文化財（国宝・重要文化財）であること。建造物群の所在地が日光市山内地区であることが、特徴としてあげられる。

第 23 回世界遺産委員会での「日光の社寺」に対する評価は、17 世紀はじめに造営された徳川家康の霊廟としての東照宮や同家光の霊廟としての大猷院の建造物やその建築様式（権現造）、さらに建造物にほどこされた装飾品などに対して高い芸術性が認められること。あわせて、こうした建造物群が周辺の山岳や森林などの自然と共存していることなどであった。<sup>(2)</sup>

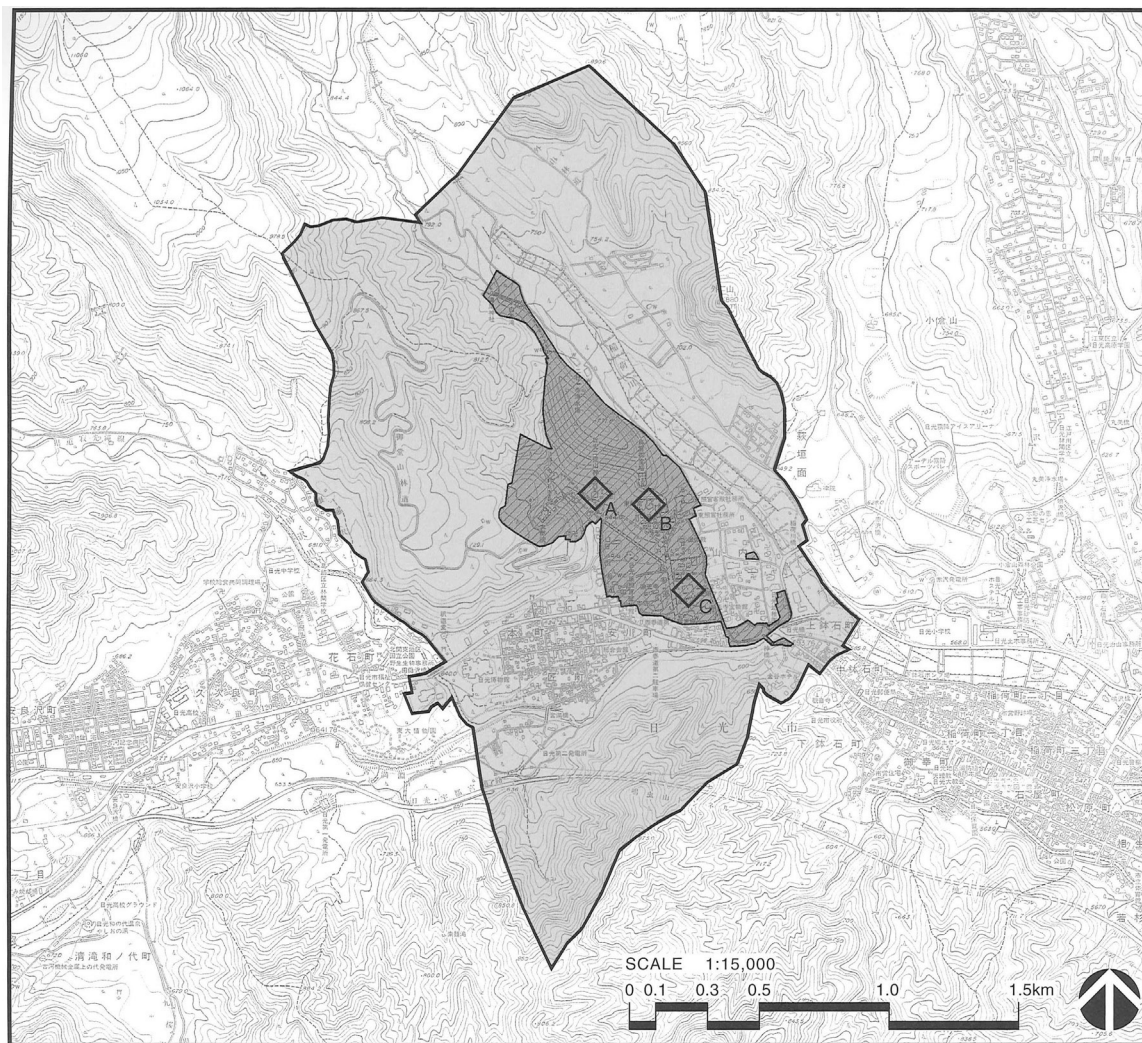
この評価は、江戸時代における徳川幕府の聖地日光としての歴史に重点が置かれていることが指摘できる。しかし、江戸時代の聖地日光としての存在のみで、文化遺産としての日光の価値を語ることはできない。このように、「日光の社寺」の評価は、特定の時代や信仰に重点が置かれた日光に対するイメージが世界に浸透してしまうことへの影響を考える必要があろう。

日光は 8 世紀末に開山勝道上人により山岳信仰の霊場として開かれ、現在に至るまでの歴史を継承する、さまざまな信仰の堂社の集合体である。こうした歴史的な土壌の上に、東照宮や大猷院が造営されている。簡単にいえば、東照宮造営以前の日光の歴史や信仰を踏まえて、東照宮の文化遺産としての位置づけをするべきではないだろうか。また、東照宮や大猷院などの建造物は、単に美術品として造られたものではなく、江戸時代における徳川幕府の聖地、すなわち信仰の対象として造営されたといえる。したがって、現実に見える建造物について、造られた背景にある歴史、その

表1 世界遺産「日光の社寺」建築物一覧

| 二荒山神社 |                   |    | 東照宮             |                          |    |
|-------|-------------------|----|-----------------|--------------------------|----|
| No.   | 建築物名              | 棟数 | No.             | 建築物名                     | 棟数 |
| 1     | ●本殿               | 1  | 44              | ●奥社鳥居                    | 1  |
| 2     | ●唐門               | 1  | 45              | ●奥社石櫓                    | 1  |
| 3     | ●掖門及び透塀           | 2  | 46              | ●仮殿本殿・仮殿相の間・仮殿拝殿         | 1  |
| 4     | ●拝殿               | 1  | 47              | ●仮殿唐門                    | 1  |
| 5     | ●鳥居               | 1  | 48              | ●仮殿掖門及び透塀                | 2  |
| 6     | ●神橋               | 1  | 49              | ●仮殿鳥居                    | 1  |
| 7     | ●別宮滝尾神社本殿         | 1  | 50              | ●仮殿鐘楼                    | 1  |
| 8     | ●別宮滝尾神社唐門         | 1  | 51              | ●御旅所本殿                   | 1  |
| 9     | ●別宮滝尾神社拝殿         | 1  | 52              | ●御旅所拝殿                   | 1  |
| 10    | ●別宮滝尾神社楼門         | 1  | 53              | ●御旅所神饌所－(1)(附)渡廊         | 1  |
| 11    | ●別宮滝尾神社鳥居         | 3  | 54              | ●旧奥社唐門                   | 1  |
| 12    | ●別宮本宮神社本殿         | 1  | 55              | ●旧奥社鳥居                   | 1  |
| 13    | ●別宮本宮神社唐門及び透塀     | 2  | 輪王寺             |                          |    |
| 14    | ●別宮本宮神社拝殿         | 1  | No.             | 建築物名                     | 棟数 |
| 15    | ●別宮本宮神社鳥居         | 1  | 56              | ●本堂(三仏堂)                 | 1  |
| 16    | ●神輿舎              | 1  | 57              | ●相輪塔                     | 1  |
| 17    | ●大国殿              | 1  | 58              | ●本坊表門                    | 1  |
| 18    | ●末社朋友神社本殿         | 1  | 59              | ●開山堂                     | 1  |
| 19    | ●末社日枝神社本殿         | 1  | 60              | ●常行堂                     | 1  |
| 東照宮   |                   |    | 61              | ●法華堂                     | 1  |
| No.   | 建築物名              | 棟数 | 62              | ●常行堂法華堂渡廊                | 1  |
| 20    | ■本殿・石の間及び拝殿       | 1  | 63              | ●慈眼堂廟塔                   | 1  |
| 21    | ■正面及び背面唐門         | 2  | 64              | ●慈眼堂拝殿                   | 1  |
| 22    | ■東西透塀             | 2  | 65              | ●慈眼堂経蔵                   | 1  |
| 23    | ■陽明門              | 1  | 66              | ●慈眼堂鐘楼                   | 1  |
| 24    | ■東西回廊－(1)(附)潜門    | 2  | 67              | ●慈眼堂阿弥陀堂                 | 1  |
| 25    | ●上社務所             | 1  | 68              | ●兄玉堂                     | 1  |
| 26    | ●神楽殿              | 1  | 69              | ●護法天堂                    | 1  |
| 27    | ●神輿舎              | 1  | 70              | ●観音堂                     | 1  |
| 28    | ●鐘楼               | 1  | 71              | ●三重塔                     | 1  |
| 29    | ●鼓楼               | 1  | 72              | ■大猷院霊廟本殿・相の間・拝殿－(1)(附)厨子 | 1  |
| 30    | ●上神庫              | 1  | 73              | ●大猷院霊廟唐門                 | 1  |
| 31    | ●中神庫              | 1  | 74              | ●大猷院霊廟瑞垣                 | 1  |
| 32    | ●下神庫              | 1  | 75              | ●大猷院霊廟掖門                 | 1  |
| 33    | ●水屋               | 1  | 76              | ●大猷院霊廟御供所                | 1  |
| 34    | ●神厩               | 1  | 77              | ●大猷院霊廟御供所渡廊              | 1  |
| 35    | ●表門－(1)(附)簾子堀     | 1  | 78              | ●大猷院霊廟夜叉門                | 1  |
| 36    | ●五重塔              | 1  | 79              | ●大猷院霊廟夜叉門左右回廊－(1)(附)潜門   | 2  |
| 37    | ●石鳥居              | 1  | 80              | ●大猷院霊廟鐘楼                 | 1  |
|       | (1)(附)鐘舎          |    | 81              | ●大猷院霊廟鼓楼                 | 1  |
|       | (2)(附)燈台總屋        |    | 82              | ●大猷院霊廟二天門－(1)(附)左右袖塀     | 1  |
|       | (3)(附)燈台總屋        |    | 83              | ●大猷院霊廟西浄                 | 1  |
|       | (4)(附)銅神庫         |    | 84              | ●大猷院霊廟水屋                 | 1  |
|       | (5)(附)渡廊          |    | 85              | ●大猷院霊廟宝庫                 | 1  |
|       | (6)(附)銅庫門及び板塀     |    | 86              | ●大猷院霊廟仁王門－(1)(附)左右袖塀     | 1  |
|       | (7)(附)非常門及び銅板塀    |    | 87              | ●大猷院霊廟皇嘉門－(1)(附)左右袖塀     | 1  |
|       | (8)(附)内番所         |    | 88              | ●大猷院霊廟銅包宝蔵               | 1  |
|       | (9)(附)西浄          |    | 89              | ●大猷院霊廟奥院宝塔               | 1  |
|       | (10)(附)東通用御門(社家門) |    | 90              | ●大猷院霊廟奥院鑄拔門              | 1  |
| 38    | ●坂下門              | 1  | 91              | ●大猷院霊廟奥院拝殿               | 1  |
| 39    | ●奥社宝塔             | 1  | 92              | ●大猷院霊廟別当所竜光院－(1)(附)玄関    | 1  |
| 40    | ●奥社唐門             | 1  | (財)日光社寺文化財保存会管理 |                          |    |
| 41    | ●奥社石玉垣            | 1  | No.             | 建築物名                     | 棟数 |
| 42    | ●奥社拝殿             | 1  | 93              | ●本地堂                     | 1  |
| 43    | ●奥社銅神庫            | 1  | 94              | ●経蔵                      | 1  |

- \* 1 ■印：国宝(9棟)／●印：重要文化財(94棟)  
\* 2 附指定物件は、木造建造物のみを記載するが棟数には含めない。



推薦資産及び緩衝地帯の位置  
並びに自然・人文環境図

|  |              |         |
|--|--------------|---------|
|  | 推薦資産         | 50.8ha  |
|  | 緩衝地帯         | 373.2ha |
|  | (推薦資産を含まない。) |         |
|  | 合計           | 424.0ha |

1 建造物群

- A 二荒山神社
- B 東照宮
- C 輪王寺

2 遺跡（文化的景観）



図1 「日光の社寺」核地域（コアゾーン）と緩衝地帯（バッファゾーン） \* 『世界遺産「日光の社寺」』（日光市教育委員会，2001年）より転載





建造物への信仰などを含めて考えなければ、東照宮などに対する真の評価はできなのではないか、<sup>(3)</sup>と考えられる。

「日光の社寺」世界遺産登録に着目した研究成果としては、東照宮などの建造物の芸術性に対する評価に関するもの、日光の信仰からみた「日光の社寺」に関する視点、国際法上における文化遺産保護の効用と機能について検討したものなどがあげられる。<sup>(4)</sup>

そこで、本論では「日光の社寺」を事例として、その文化遺産としての評価の特徴や課題点を考えてみたい。

## 1 「日光の社寺」世界遺産登録の経緯

まず、「日光の社寺」の世界遺産登録までの経緯とともに、文化遺産としての評価がどのように決定されたのかを把握しておきたい。

### (1) 世界遺産登録の経緯と評価

日光市教育委員会では平成 13（2001）年に「日光の社寺」世界遺産登録の報告書として『世界遺産「日光の社寺」』を発刊している。本書には、登録までの経緯や「推薦書」などの関連資料も収められている。ここでは、「日光の社寺」の世界遺産登録までの経緯や第 23 回世界遺産委員会での「日光の社寺」に対する評価がどのように決定したのか、本書をもとに概要を述べておく。<sup>(5)</sup>

平成 4（1992）に日本は世界遺産条約を批准し、今後 10 年間に世界遺産に登録推薦する予定の文化遺産候補 10 件の暫定目録をユネスコに提出した。暫定目録の内容は、京都・奈良・鎌倉の歴史的都市、法隆寺・厳島神社・日光の宗教建築群、姫路城・琉球の城・彦根城の城市群、白川村の農村集落からなるものであった。日光が暫定目録に記載された理由としては、徳川家康・家光の権現造の廟を中心にして、長い神仏習合の歴史の中で社寺建築が一体的に混合した歴史的特徴が評価されたことによる。<sup>(6)</sup>

このように、暫定目録への記載により、日光と世界遺産との関わりがはじまったことや、暫定目録段階から江戸時代の徳川氏との関わりが評価対象であったといえる。

この後、「日光の社寺」に関する動きとしては、同 6 年 7 月には文化庁による世界遺産推薦の説明会、同 9 年 10 月には世界遺産登録推進班（世界遺産の対象となる社寺、栃木県、日光市などから構成）を設置し、『推薦書』の策定を開始するなど、世界遺産登録への体制が整備されていった。

同 10 年 6 月、ユネスコに「日光の社寺」世界遺産登録のための『推薦書』が提出された。『推薦書』の文化資産としての価値証明として、「日光の社寺」は 17 世紀の徳川家墓所を中心とする宗教施設の複合の文化遺産と位置づけ、また 8 世紀末の仏僧勝道による日光開山以来、約 1200 年の歴史を有し、古くから山岳信仰の聖地となり、自然環境と一体となって、神道・仏教・徳川家墓所の複合した宗教的霊地としての日光山の歴史を現在まで継承していること。さらに、江戸時代における東照宮や大猷院等の建造物やその高度な芸術的価値、その保全の体制などが書かれてある。<sup>(7)</sup>

この『推薦書』の提出を受けて、同年 12 月 7・8 日に世界遺産委員会の諮問機関である ICOMOS（国際記念物遺跡会議）による現地視察が実施された。ICOMOS の現地視察の評価は、「日光の社寺」は自然の中に配置された宗教建築群で、幾世紀にもわたり聖地として存在し、今日

でも宗教儀礼の一つの中心であること。特に、徳川家康に関連付けられた、日本史の輝かしい時期を再現していること。さらに、極めて高いレベルの芸術創造建築と自然配置の共存などを高く評価している<sup>(8)</sup>。

この後、同11年12月2日の第23回世界遺産委員会において「日光の社寺」世界遺産登録が議題となり、ICOMOSの報告を受けて、審議の結果、世界遺産への登録が正式に決定した。この時の「日光の社寺」世界遺産登録における評価は、以下の3点であった<sup>(9)</sup>。

- (1) 日光の社寺は、建築と芸術の天才的作品であり、これら建物群が調和ある一体的構成をなして、森の中に自然に人々の手で配置されていることで、いっそう引き立っている。
- (2) 日光は、江戸時代における社寺建築様式の完璧な事例である。東照宮と大猷院霊廟の二廟にみる権現造様式は、日光において最高表現に達したものであり、その後に決定的な影響を与えた。ここに建築家達や装飾芸術家達の精妙さと創造性が、きわだって見事に現れている。
- (3) 自然と人間の関係についての神道の考え方と関連して、日本の社寺はその自然環境とともにあることで、日本の伝統的な宗教的中心地でもきわだったものとなっている。ここでは、山岳や森林は信仰の対象として聖なる意味を持ち、今日もなお宗教的活動が活発に行われている。

以上、「日光の社寺」世界遺産登録までの経緯と文化遺産としての評価についてみてきたが、第23回世界遺産委員会での「日光の社寺」に対する文化遺産としての評価は、大筋では日本側が作成した『推薦書』で提案した「日光の社寺」に対する文化遺産としての評価が基本的に受け入れられたことが確認できる。すなわち、日本側の申請体制が世界遺産「日光の社寺」の文化遺産として評価の決定において重要な部分を占めていたといえる。

つぎに、世界遺産登録までの評価に共通している点は、東照宮や大猷院などの建造物や装飾品に対する高い評価である。それに反して、日本側が世界遺産登録の申請段階から東照宮や大猷院の信仰や祭礼をはじめ、日光の江戸時代以外の歴史や信仰についてはあまりふれられていないことが指摘できる。

## (2) 世界遺産登録の前提条件と「日光の社寺」

世界遺産登録にあたり、「日光の社寺」では対応しなければならない3つの前提条件があった<sup>(10)</sup>。

- (1) 国内法により文化遺産が保護されていること。
- (2) 遺産の所在する国が責任を持って適切に、その認定・保護・保存・整備・活用を行うこと。
- (3) 文化遺産の周辺環境が緩衝地帯（バッファゾーン）として適切に保護されていること。

(1)への対応であるが、「日光の社寺」の場合、世界遺産に登録された103棟の建造物群は昭和26（1951）年に東照宮の本殿・陽明門など計8棟の国宝指定、翌27年に大猷院霊廟本殿の国宝追加指定など、世界遺産登録以前に国による保護を受けるなど、「日光の社寺」では相当早い段階から第1の条件を満たしていた。

昭和33（1958）年、ICOMOSの「ヴェニス憲章」で「遺跡は崩れ行く廃墟として保存すべきであり、推測を交えた復元と再現は遺跡の真実性をゆがめることとなるため、厳しく戒められるべき



である」<sup>(11)</sup>と定められた。石造建造物なら崩れたままでも長く残るが、木造建造物は補修・再建を繰り返さない限り消滅してしまう。したがって、「ヴェニス憲章」により日本やアジア諸国などの木の文化では、もとのとおりに造替し補修していく技術の保全が必要条件となった。

(2) の前提条件では、特に文化遺産の保全や建造物の敷地等が史跡などとして保護されていることが求められた。

日光における文化遺産の保全への動きは、徳川幕府の崩壊、明治新政府による神仏分離、廃仏毀釈の運動により、特に輪王寺などの寺院で大きな破壊を受けるなど荒廃した。こうした日光の文化遺産の危機を憂慮し、明治 12 (1879) 年に日光の社寺の建造物の修繕・保存を目的とする民間団体「保見会」が安生順四郎 (1847 ~ 1928, 後に保見会副会長, 上都賀郡長などを歴任) ら有志により設立され、日光の社寺の修理等を開始した。保見会の目的は、「日光山祠堂ノ壮観及比名勝ヲ永世ニ保存」(保見会規則) することにより、この実現のために広く寄金 (保見金) を募り、全国的な組織へと発展していった。同 30 年、政府は「古社寺保存法」を制定して、文化遺産の保護に乗り出すと、政府及び二社一寺で社寺修繕事務所が設置された。この後、大正 5 (1916) 年に保見会は解散した。保見会が日光社寺の維持で努力した事業は、主として資金調達であり、技術的には社寺修繕事務所が担っていた。<sup>(12)</sup>

日光の文化財保護の歴史は、政府に先立ち民間団体である保見会により開始されたといえ、この点は日本の文化財保護の歴史からみても特記できることである。社寺修繕事務所の技術は、現在、財団法人日光社寺文化財保存会に受け継がれている。<sup>(13)</sup>このように、保見会以降の文化財の保護保全の活動や高い技術により、今日まで「日光の社寺」の建造物群が維持されてきたのである。

つぎに、文化遺産の敷地などの史跡指定であるが、これが「日光の社寺」の世界遺産登録に先立ち、早急に解決しなければならない問題であった。特に、日光市山内地区のコアゾーン (神域として文化的景観と位置づける背後の森林の敷地を含む) は文化財保護法による史跡として未指定となっていた。昭和 30 (1955) 年に国の文化財保護審議会はコアゾーンの史跡指定の答申を行ったが、日光の地元住民が難色を示し、実現には至らなかった。<sup>(14)</sup>

しかし、平成 4 (1992) 年の世界遺産暫定目録の決定にあたり、文化庁は史跡指定が前提となることを関係者に説明し、日光市山内の土地の史跡指定合意のために国県市と地元土地所有者との協議を開始した。当初、日光市山内の住民からは道路改修等の開発に制限がかかるとの見方がなされ、冷やかな態度であったという。これに対して、観光業者は賛成の意向を示していた。この意向の背景には、日光を訪れる観光客数が同 2 年に 810 万人であったが、同 11 年で 573 万人まで減少していることがあげられる。最終的には、同 10 年 4 月に日光市山内地区の史跡指定を、国の文化財保護審議会に報告・了承され、同年 5 月に日光市山内地区が史跡として指定された。<sup>(15)</sup>

(3) の文化遺産の周辺環境の緩衝地帯の設置であるが、「日光の社寺」の場合、文化遺産のコアゾーンの周辺地域は、既に自然公園法による日光国立公園、都市計画法による風致地区、森林法による保安林、日光街並景観条例による街並景観形成地域が設定されていた。<sup>(16)</sup>

## 2 近代ツーリズムと日光の文化財

世界遺産の文化遺産に対する定義では、国際的な普遍的価値を有することが重要な条件となって

いる。そして、世界遺産は人類全体の世界の遺産として保護されることを意味する<sup>(17)</sup>。すなわち、世界遺産の登録において、文化遺産の国際的な認知度も大きな条件といえる。

幕末の開港後、国内旅行の規制のあるなかでも、日光は横浜に滞在する外国人にとって、夏における格好の避暑地となり、徐々に日光を訪れる外国人も増加していった。このように、近代日光の国際化は、横浜などの外国人による近代ツーリズムとともに<sup>(18)</sup>はじまったといえる。

日光を訪れた最初の外国人は、明治3(1870)年にイギリス公使ハリー・パークス夫妻とこれに同行したアーネスト・サトウらであった。これ以降、同6年に司法省法律顧問のブスケ、同7年にフランスの東洋美術館の創設者、エミール・ギメ、同10年にE・S・モース、同11年にイザベラ・バード、同12年にグラント將軍など、多くの外国人が訪れている<sup>(19)</sup>。

彼らの多くは、その紀行文の中で日光の風土や文化などの詳細な観察とともに、東照宮などの建築の高い芸術性を褒め称えている。また、アーネスト・サトウは、同5年の『A GUIDEBOOK TO NIKKO』という日光旅行の案内書を発刊した。この案内書には奥日光の中禅寺方面までも紹介している。こうした旅行案内書のほか、同17年には『GUIDE MAP OF NIKKOSAN JAPAN (大日本帝国日光山手引案内附図 日光山絵図)』など、ローマ字が併記された日光名所絵図などが<sup>(20)</sup>発刊されるなど、外国人向けの日光旅行案内書や地図が発刊されるようになった。

サトウは、同17年11月10日に中禅寺を訪ねているが、その日、サトウは足尾から中禅寺湖へのルートで中禅寺に向かった。同日午後1時37分に中禅寺の米屋という旅館に到着した。

ここで、同17年11月10日の米屋での記事をあげておく<sup>(21)</sup>。

十二時には頂上を出発して途中で十分間休憩して中禅寺の<sup>こめや</sup>米屋には一時三十七分に到着した。人々はとても礼儀正しい。白根山から北西の恐ろしく冷たい風が吹きおり、木々は完全に落葉していた。ここで、一夜を過ごし明日になって風が止んだら湯元へ向かおうと決めた。『ハンドブック』で好意的にとりあげて記述してくれたお礼にと、宿のおかみが近隣の光徳でとった雉をくれた。今年は五千人の巡礼者が訪れたということだが例年に比べて少ないようだ。(後略)

米屋の経営者は米屋政平で、外国人のために自己名義で土地を求めて、これを別荘用地として提供していた<sup>(22)</sup>。

この記録によれば、米屋のおかみが『ハンドブック』で好意的にとりあげてくれたお礼に、近隣の光徳でとれた雉を差し入れされている。この『ハンドブック』とは、中禅寺などの奥日光まで紹介する外国人用の日光旅行案内書のことであろう。中禅寺湖などの奥日光のリゾート化が本格化する<sup>(23)</sup>のは、同33年頃とされるが、サトウの米屋の記録は、同17年段階で既に、中禅寺湖畔の旅館にとって、外国人宿泊者の獲得に有効な手段であったことが想像される。

日光は東京、横浜から比較的近距离に位置していたことも好条件となり、日光を訪れる外国人の数は、同15年5月～16年4月に168人であったが同18年5月～同19年4月に723人へと、この間<sup>(24)</sup>で約4倍増加している。

すなわち、明治初年から日光は横浜などの外国人の避暑地となるなど、外国人の日本国内ツーリ



ズムの進展とともに、東照宮などの建造物の芸術的価値が外国人の間で知られるようになっていったと思われる。

日光の場合、外国人による近代ツーリズムに着目した民間団体もあった。それが、先に触れた日光の文化財保護を行った保見会である。保見会の主たる目的は日光山及び社寺堂宇の保護保存にあったが、発起人の安生順四郎は日光を観光資源として捉え、日光への鉄道敷設などを計画するなど、積極的な日光の経済振興を図ることにより日光の文化財保護を推進しようと構想していた<sup>(25)</sup>。

同12年11月11日に「保見会創立願」・「日光山神社仏閣保存之義ニ付願」・「緒言」を内務卿伊藤博文に提出し、同月28日に公許となる。「日光山神社仏閣保存之義ニ付願」には「東京ヲ距ル甚ダ遠カラズ、元避暑ヒ便ナリ、故ニ近来、外客ノ来航スル者モ亦、競フテ此勝城ヲ踏ミ、以テ郷国ニ齎ラスノ談柄トス、実ニ皇国ノ美観ニシテ、海外ニ誇輝スベク、所謂殊世ニ存スベキノ偉跡、返方ニ伝フベキノ国光ト奉存候<sup>(26)</sup>」とある。これより、保見会の発起人安生らには日光を外国人の訪れる国際的な観光地であるとし、日光の文化財や景観が重要な観光資源であることを意識していたことがうかがえる。

同14年2月、保見会役員が諸外国の名勝旧跡等の保存状況を聞くため、アーネスト・サトウを訪ねている。サトウは保見会の主旨に賛意をあらわし、彼は各国公使らに保見会への援助を求めた。この結果、同17年4月までに多数の外国人から保見会への寄附金（保見金）は415円にもなった。同26年には、保見会は増加する日光の外国人客へのサービスの一環として、「浩養園<sup>(27)</sup>」と称する人工の公園を設置している。

すなわち、明治初年の保見会による日光の文化財保護の動きは、観光資源化など、日光の経済振興策と表裏一体のかたちで進められたといえる。

### 3 中世日光山の信仰と東照宮

「日光の社寺」は、二荒山神社、東照宮、輪王寺の二社一寺として登録される。二社一寺は、現在、それぞれ別の宗教法人として明確に分かれているが、明治4（1871）年に日光で神仏分離が実施されるまでは、分離不可能なものとして存在していた。特に、東照宮は江戸時代には公的には輪王寺所有の徳川家康の霊廟として存在していた。さらに、神仏習合の時代に日光は、日光山と総称されていた<sup>(28)</sup>。

ここで、中世日光山の信仰の特徴についてふれておきたい。

日光山は、8世紀末に勝道により男体山を中心とした日光連山への山岳信仰の霊場として開かれた。現在に至るまでの歴史を継承する、多様な信仰の堂社の複合体からなる文化遺産である。中世日光山の信仰を象徴するのが、鎌倉期に成立したとされる日光三所権現信仰である。これは古来の日光山の山岳信仰に、特に本地垂迹思想が融合して体系化された信仰である<sup>(29)</sup>。

日光の山岳信仰は、男体山に男神、女峰山に女神が宿するという二神信仰から始まった。男神は男体権現、女神は女体権現と称された。その後、両神の御子神として、太郎山に宿る太郎権現を加え、三神の信仰が形成された。そして、この信仰は本地垂迹思想の影響を受け、男体山―女峰山―太郎山には、それぞれ男体権現＝千手観音、女体権現＝阿弥陀如来、太郎権現＝馬頭観音が宿するという信仰形態として体系化され、日光三所権現信仰が成立した<sup>(30)</sup>。

また、日光三所権現信仰に基づく堂社も日光山の各地に建立されている。男体権現を祀る新宮（現・二荒山神社本社）、女体権現（滝尾権現）を祀る滝尾（現・滝尾神社）、太郎権現（本宮権現）を祀る本宮（現・本宮神社）である。これに、山内と男体山の中の宮にあたる中禪寺（現・二荒山神社中宮祠）、男体権現の妾神とされる寂光権現を祀る寂光寺（現・若子神社）が建立され、それぞれ<sup>(31)</sup>の別所には日光山衆徒が上人として参籠した。

すなわち、中世日光山の宗教的空間は、「日光の社寺」で登録された緩衝地帯（バッファゾーン）よりも広域であったといえる。この宗教的空間は、東照宮造営以降も断絶することなく継承された。

中世日光山の信仰は、日光三所権現信仰を核として展開したが、それ以外にも多様な信仰の展開がみられた。

坂東三十三観音霊場としての中禪寺<sup>(32)</sup>、ついで文明年間（1469-87）成立の釘念仏信仰の寂光寺<sup>(33)</sup>、六十六部聖や納経信仰の滝尾<sup>(34)</sup>、一山の菩提所としての清滝寺などの空海創建伝承の堂社における来世信仰、そして、天台系の中心的な堂社である常行堂の鎌倉と直結した信仰や、中世末期には「関左之日枝山（関東の比叡山）」と呼称されるなど、中世の関東天台の権威としての存在<sup>(36)</sup>があった。

中世日光山の信仰と東照宮の直接的な関係を示す事例のひとつが、東照宮別所の「床之浄火」と「三品立之御供」である。

日光三所権現信仰の滝尾権現を祀る滝尾は空海創建の伝承をもつ真言系の堂社として、近世末期まで存在していた。現在、滝尾は二荒山神社の別社、滝尾神社となっているが、家康の神柩が納められている東照宮奥社の裏山の奥に位置している<sup>(37)</sup>（図2・表1参照）。

滝尾の年中行事帳の中で、延宝6（1678）年8月に教城院天祐が編纂した「滝尾山年中行事」に、滝尾の祭礼と東照宮の祭礼の関わりを示す興味深い記事があるのであ<sup>(38)</sup>げておく。

一、東照宮御別所床之浄火滝尾床ノ浄火被移之、并 東照宮三品立之御供滝尾之御儀式被移之、但 東照宮当山江御勸請之最初 秀忠公御供之儀式御定之節、伊勢・春日・八幡・当社之儀式以書付 御上覧之上滝尾御供被ルト移之也

日光山一山の老僧の間では、東照宮別所（大楽院、別当）の「床之浄火」及び「三品立」（三品立七十五膳）と称する御供は、滝尾の儀式を移したものであるとしている。そして、伊勢神宮・春日社・石清水八幡宮・滝尾の儀式を比較した結果、將軍秀忠の裁定により滝尾の儀式が採用されたとい<sup>(39)</sup>う。

このほか、現在の東照宮例大祭では、5月18日に千人武者行列と称する神輿渡御行列が行われるが、その前日、二荒山神社拝殿に神輿3基が渡御し、宵成祭が東照宮・二荒山神社の神職により執行され、神輿は一晩二荒山神社に駐輦する。この神輿の渡御の形態は新宮から滝尾への神輿の渡御<sup>(40)</sup>の祭礼を移したものであるといわれている。

すなわち、東照宮の祭礼には中世の滝尾の儀式が移されたものがあるなど、東照宮の祭礼形成において中世日光山の信仰が重要な役割を果たしていたといえる。

---

## おわりに

以上、「日光の社寺」を事例として、その文化遺産としての評価の特徴や課題点についてみてきた。

「日光の社寺」に対する文化遺産としての評価は、江戸時代の東照宮や大猷院などの建造物や装飾品に対する高い評価を得ているが、この評価は日本側が作成した『推薦書』で提案した文化遺産としての評価内容がほぼ踏襲されたものであったといえる。

また、「日光の社寺」では東照宮・大猷院などの江戸時代の建造物群が高く評価されている背景には、現在まで江戸時代の建造物がよく保護保全されていることを示している。とくに、世界遺産の文化遺産においても、建造物の保護保全されていることやその技術の継承が重要な部分となっているが、「日光の社寺」の場合、明治12（1879）年に組織された民間団体の保見会以降の保存活動により、江戸時代の建造物がよく保護保全されてきたことも、世界遺産登録での高い評価につながっている。また、保見会による文化財保存の活動は日光の観光資源化など、日光の経済振興策と表裏一体のかたちで進められてきていたといえる。

さらに、世界遺産では国際的な普遍的価値が大きな条件となっており、世界遺産登録において文化遺産の国際的な認知度も登録における重要な条件と考えられる。「日光の社寺」の場合、明治初年以降の横浜にいた外国人の避暑地となるなど、多数の外国人が訪れる観光地となっていた。こうした外国人による日本国内ツーリズムの進展にともない、東照宮などの建造物の芸術的価値が外国人の間に知られるようになっていったと思われる。以上が、世界遺産登録からみた「日光の社寺」の文化遺産の評価の特徴といえる。

最後に、「日光の社寺」の課題点であるが、「日光の社寺」は宗教建築群として世界遺産に登録されたものであり、その評価の対象が東照宮や大猷院などの建築物に集約されてしまうのは仕方のないことかもしれない。しかし、「日光の社寺」の存在は、東照宮や大猷院などの江戸時代の建造物のみで語ることは難しい。とくに、中世日光山の信仰をみれば日光三所権現信仰を核に、さまざまな信仰の集合体として存在していた。それらの信仰は、江戸時代に東照宮造営以降も断絶することなく継承されていた。また、中世滝尾の儀式（「床之浄火」「三品立之御供」）のように東照宮の祭礼に吸収されたものも存在するなど、東照宮の祭礼は、中世日光山の信仰や祭礼が深く結びついていたといえよう。

すなわち、東照宮や大猷院は「日光の社寺」の歴史や信仰も含め位置づけることが必要であるといえる。こうした課題は、他の世界遺産でも想定されると思われる。今後の課題は、日本にある宗教建築群として世界遺産に登録されている文化遺産も含めて検討していきたい。



---

註

---

- (1)——稲葉久雄「『日光の社寺』世界文化遺産に登録されて」(『大日光』70, 2000年), 惣脇宏「『日光の社寺』の世界遺産登録」(『大日光』70, 2000年), 古口紀夫「『日光の社寺』の世界遺産登録によせて」(『大日光』70, 2000年), 齋藤隆男「世界遺産登録と市民の責務」(『大日光』70, 2000年), 大河直躬「世界遺産としての日光の社寺建築」(『大日光』70, 2000年), NHK・NHKプロモーション編・発行『世界遺産登録記念「聖地日光の至宝展」(2000年), 日光市教育委員会事務局社会教育課『世界遺産「日光の社寺」(2001年), 小野昌紀「世界遺産に登録されて一日光市の取り組みから」(歴史・文化のまちづくり研究会『東照宮建築の魅力』, 2001年), 菅原信海『日本人と神たち仏たち』(春秋社, 2003年), 関根理恵「『世界遺産・日光の社寺』の文化遺産保存政策の歴史的経緯」(『歴史と文化』16, 2007年)。
- (2)——前掲註(1)『世界遺産「日光の社寺」』。
- (3)——前掲註(1)菅原書。
- (4)——前掲註(1)大河論文, 同「日光の建築の魅力」(前掲註(1)『世界遺産登録記念「聖地日光の至宝展」, 2000年), 千田孝明「神と仏の聖地・日光」(同上書, 2000年), 前掲註(1)菅原書, 前掲註(1)関根論文等。
- (5)——前掲註(1)『世界遺産「日光の社寺」』。本書には, 世界遺産登録までの経緯や「推薦書」などの関連資料が納められており, 「日光の社寺」世界遺産登録の全容を知ることができる。
- (6)——前掲註(1)『世界遺産「日光の社寺」』・関根論文, 奈良大学文学部世界遺産を考える会編『世界遺産学を学ぶ人のために』(世界思想社, 2000年)。
- (7)——前掲註(6)。
- (8)——前掲註(1)関根論文。
- (9)——前掲註(1)『世界遺産「日光の社寺」』。
- (10)——前掲註(1)『世界遺産「日光の社寺」』。
- (11)——鎌田道隆「日本の世界遺産」(前掲註(6)『世界遺産学を学ぶ人のために』, 2000年)。
- (12)——保見会・社寺修繕事務所については, 日光市編さん委員会編『日光市史』下巻(日光市, 1979年), 同『日光市史』史料編 下巻(日光市, 1986年), 石川明範「保見会 日光の保存につくした人々」(栃木県歴史文化研究会近代日光史セミナー編『日光近代学事始』, ずいそうしゃ新書6, 随想社, 1997年), 前掲註(1)惣脇論文, 丸山宏「日光国立公園の成立」(同『近代日本公園史の研究』思文閣, 2003年, 初出は1994年)。
- (13)——財団法人日光社寺文化財保存会は, 文化財保護法による選定保存技術「建造物彩色」の保持団体としての認定を受けている(前掲註(1)惣脇論文)。
- (14)——前掲註(1)『世界遺産「日光の社寺」』。
- (15)——前掲註(1)小野論文・『世界遺産「日光の社寺」』。
- (16)——前掲註(1)『世界遺産「日光の社寺」』。
- (17)——西山要一「ユネスコの世界文化遺産」(前掲註(6)『世界遺産学を学ぶ人のために』世界思想社, 2000年), D・オドルリ R・スシエ L・ヴィラール著・水嶋英治訳『世界遺産』(文庫クセジュ888, 白水社, 2005年)。
- (18)——前掲註(12)『日光市史』下巻, 福田和美「避暑地・日光町 —そのつかの間の夏」(栃木県歴史文化研究会近代日本史セミナー編『日光近代学事始』, ずいそうしゃ新書6, 随想社, 1997年), 前掲註(12)丸山論文。
- (19)——前掲註(18)。
- (20)——前掲註(18)。
- (21)——アーネスト・サトウ著・庄田元男訳『日本旅行日記』2(東洋文庫550, 平凡社, 1994年, 初出は1992年)。
- (22)——アーネスト・サトウは, 『中央部・北部日本旅行案内』(明治14年初版)の中で「中禅寺湖畔の村の中心に近いところに若干の快適な宿があり, 特に湖の展望にめぐまれている米屋が推奨できる。粗末だがテーブルと椅子が用意されていてビールも飲める」と, 米屋を評している。
- (23)——前掲註(12)『日光市史』下巻, 砂本文彦「日光観光ホテルと国際リゾート地開発」(同『近代日本の国際リゾート——一九三〇年代の国際観光ホテルを中心に』青弓社, 2008年)。
- (24)——前掲註(12)丸山論文。
- (25)——前掲註(18)。
- (26)——前掲註(12)『日光市史』史料編 下巻。
- (27)——前掲註(12)。
- (28)——日光市史編さん委員会編『日光市史』上巻・中巻・下巻(日光市, 1976年), 秋本典夫『近世日光山史の研究』(名著出版, 1982年, 初出は1975年), 宮田登・宮本袈婆雄編『日光山と関東の修験道』(山岳宗教史研究叢書8, 名著出版, 1986年, 初出は1979年)等。
- (29)——前掲註(28)『日光市史』上巻, 中川光熹「日光山修験道史」(前掲註(28)宮田・宮本編書), 宮本袈婆雄「男体山信仰」(同上書), 千田孝明「応永・永享期の

日光山」(地方史研究協議会編『宗教・民衆・伝統一社会の歴史的構造と変容一』, 雄山閣, 1995年), 同「神と仏の聖地・日光」(前掲註(1)『世界遺産登録記念「聖地日光の至宝展」』, 2000年)等。

(30)——前掲註(29)。

(31)——前掲註(29)。

(32)——前掲註(29) 千田「神と仏の聖地・日光山」。

(33)——近藤喜博「釘念仏の周辺」(『日光山輪王寺』12, 1958年), 中川光熹「日光山寂光寺釘抜念仏について」(『日光山輪王寺』61, 1995年), 同「日光山寂光寺釘念仏とその伝播について」(『歴史と文化』10, 2001年)。

(34)——拙稿「下野の経塚資料とその特徴」(『栃木県立博物館研究紀要 人文』18, 2001年), 同「布教者の活動から見た中世日光山」(『山岳修験』29, 2002年), 同「日光山滝尾の如法経信仰」(『駒沢史学』58, 2002年)。

(35)——山澤学「近世日光山惣山組織と法会の編成」(同『日光東照宮の成立—近世日光山の「荘厳」と祭祀・組織—』思文閣, 2009年)。なお, 本論文で山澤氏は中世末期の日光山内における真言系堂社や真言僧の動きを詳細に論じている。

(36)——中世日光山の天台宗や常行堂に関する研究としては, 日光山輪王寺門跡教化部『日光山輪王寺史』(1966年), 前掲註(28)『日光市史』上巻, 栃木県史編さん委員会『栃木県史』通史編3 中世(1984年), 前掲註(28)宮田・宮本編書, 千田孝明「輪王寺蔵の大般若経について—応永三年十月十八日頓写経の成立をめぐって—」(『栃木県立博物館研究紀要』5, 1988年), 曾根原理「『関左之日枝山』考」(『東北大学附属図書館研究年報』25, 1992年。曾根原『徳川家康神格化への道』(吉川弘文館, 1996年)に再録), 拙稿「戦国期日光山の動向」(『史学

論集』22, 1992年), 菅原信海「平安末の日光山と額田僧都寛伝」(大久保良順先生傘寿記念論文集刊行会編『仏教文化の展開—大久保良順先生傘寿記念論文集—』山喜房仏書林, 1994年, 菅原『日本思想と神仏習合』(春秋社, 2003年)に再録), 新井敦史「室町期日光山の組織と運営—堂講相論・皆水精念珠紛失事件の検討を通して—」(『古文書研究』40, 1995年), 前掲註(29)千田「応永・永享期の日光山」, 拙稿「日光山別当昌淳発給文書の基礎的考察」(『かぬま歴史と文化—鹿沼市史研究紀要—』1, 1996年), 新井敦史「室町期日光山の所領支配機構—座主と(惣)政所の位置づけを中心として—」(同上2, 1997年), 同「応永期日光山領符所郷関係文書の再検討」(同上6, 2001年), 江田郁夫「武力としての日光山—昌膳の乱をめぐって—」(『日本歴史』638, 2001年), 拙稿「日光山の組織と意思決定—慶守の活動を通じて—」(『かぬま歴史と文化—鹿沼市史研究紀要—』6, 2001年), 千田孝明「日光山をめぐる宗教世界」(浅野晴樹・斎藤慎一編『中世東国の世界』1 北関東, 高志書院, 2003年), 鹿沼市史編さん委員会編『鹿沼市史』通史編 原始・古代・中世(鹿沼市, 2004年), 千田孝明「中世日光山の光と影—幻の『光明院』, その栄光と挫折—」(橋本澄朗・千田孝明編『知られざる下野の中世』随想社, 2005年)等があげられる。

(37)——滝尾神社の本殿, 唐門, 拝殿, 楼門, 鳥居などの建築物が世界遺産として登録されている。

(38)——日光山内 輪王寺文書(鹿沼市史編さん委員会編『鹿沼市史』資料編 古代・中世, 1999年)。

(39)——山澤学「日光東照宮祭祀の存立原理」(前掲註(35)山澤書)。

(40)——高藤晴俊「日光東照宮の信仰について」(前掲註(28)宮田・宮本編書)。

(駒沢女子大学人文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2009年5月28日受付, 2009年9月25日審査終了)